

君の御蔭

鷺 水

なつかしき吾故里なる豊岡に、こたび尋常小學校新築落成せしといふを聞きて、うれしさのあまり、うたひ出しがまゝを送りて二百にあまる愛らしの數へ子どもに分ち給へけるは

(上)

治る御代の三十余ハヒモトヨ

六歳の春を積ねける

頃は彌生の空高き

霞につゝく朝烟

民のかまども豊なる

岡べにたちし學校はまかびや

文の林の奥ふかく

わけ入れそめん道しるべ

國の光をいとしく

かゝやかさんと教へ子が

學の海に漕ぎ出る

ともゆなとかん港なり

(下)

君が御蔭にたちそめし

その學びやに光得て

緑いやますかよとらん甲山

ふもとをめぐる寒川さむかひも

清き流れの末遠く

沖津島山波たゝで

よる藻かくなるうなむらも

爪木つまぎ木の實を拾ふ子も

もれぬ恵みの君が代は

千代に八千代と歌ひつゝ

祝ふ今日こそうれしけれ

祝ふ今日こそ樂しけれ

(甲山は故里の山にて寒川は故里なる川なりかし)

病める友を思ひて

東くみ子

行末とほき
 いかに楽しく
 こゝらの月日
 わはれ幸なき
 病める友をば
 曾て遊びし
 君病みまして
 さまよふ心

* * *

世の春を
 夢みつゝ
 すぎけむを
 わが友よ
 たすけつゝ
 その浦に
 今ひとりに
 如何ならむ

* * *

涙に似たる
 物思ふ窓に
 世をうくひすの
 垣の紅梅

春の雨
 灑く夕
 聲おいて
 花は落ちぬ

友のつどい

つねを

まなひの窓のはらからよ

今日のつどひの嬉しさに

幼なごころのうつくしく

ともに語らんいつまでも

心の友のここかして

群れあふれたるこのむしろ

はたるも雪もおもはず

樂しき節をあはせまし

花の袂 全 人

かすむ春野に はるの もえいづる

すみれ蒲公英 たんぽぽ つくづくし

はなの袂に たもと あまるまで

摘むうれしさを 門にまづ

わがたらちねに ちかげてむ